

# ついに来た来た ホンジュラス！(16)

3月11日

暑い……。暑さのために、夜中に何度も目が覚める。1時間毎に目が覚め、時計ばかりを見るが針は、さほど進んでいない。最近両親が送ってくれた温度計と湿度計によると、ここ2・3週間の間、午前0時の気温は32度、湿度は70%だ。

短波ラジオでNHKの「ラジオ日本」が、雑音の中から何とか聞き取れるので、耳を研ぎ澄まして聞いている。それでも初めてラジオから日本語が聞こえたときには、懐かしさからか嬉しさからか、涙が止まらなかった。そのラジオによると、「今日は啓蟄」だとか「日差しが暖かく」とかの、春の話題が多くなってきた。私が知らない間に日本は寒くなり、そしてまた私が知らない間に、日本は暖かくなっているらしい。そしてまた私が知らない間に、日本は暑くなり、また知らない間に涼しくなる。そしてまた私が知らない間に寒くなり、また知らない間に、暖かくなり始める頃には……。私もいよいよそれに合流！

しかしその間、ずっとこちらは「暑い」まま。私は2年の任期だが、ここで生まれ亡くなっていく人は、ずっと一生この「暑い」まま。

ここに来た当初はこう思った。「こうも暑いのが一生続くとと、人間は思考停止するなあ。何もやる気がなくなるじゃん。」と。しかし最近、この暑さの中で一生を終えていく人に、尊敬の念さえ覚える。「この中で、ずっと生きてるだけで十分な高い価値じゃないか」と。

四季の変化が際立ってあって、自然の香が多彩にあるからこそ、人はその変化に想いを巡らせ多様で繊細な文学や思想を生み出せる、それぞれの文化の特徴はここにあるのはもちろんだ。大げさに言えば、ここの気候では人は何をしなくてもバナナや椰子の木の実がいくらでも手に入るのだから、現金収入を求めずただ生きていけばならあまり障がない。そこで「算数の指導法」だとか「約束を守ろう」だとか、そんなこと唱えても無意味に等しいのが分かるような気がする。この熱風と灼熱の太陽の下、また慢性的な水不足（以前にも書いたように、時々驚異的なほどの集中豪雨が降るが、その

水を有効利用できていないため、直接水不足の解消に繋がらないところが悲しい。)のもと、もちろん人工的に涼しくするクーラーなどの機械がない中、一生を生きるには、言葉にはしないまでも何か自分の中の悟りがないと不可能だと思う。

うちのママに、この温度・湿度計を指さされ、「これは何だ？」と聞かれるから、必死でいろいろ説明したのだが、どうもよく分かってくれない。彼らは、風邪などで熱を出したときにも、体温計などはないし、その存在を知らないので使わない。物事や現象を、普遍単位で表すという認識が少ないのだ。

ここには、野菜や肉を量り売りするために「重さを量るはかり」は、一般的に普及している。それは日常の生活と経済活動に、より密着しているから普及が進んでいるんだろう。だが、「長さを測るはかり、ものさし」は、生活への密着性が少ないのか重さに比べたらまだまだ普及していない。そして、もっと普及していないのが、「空気の温度をはかるための、はかり」なのだ。空気や物質の温度を、数字に置き換え普遍単位で表すことができるという考えが、どうも理解できないらしい。それとも、それは知らないことの方が、ここで生きるには幸せなことなのかもしれないけど・・・。

### **ホンジュラスであって、ホンジュラスでない島**

ホンジュラスには、妙な土地がある。ホンジュラスであって、ホンジュラスではない所だ。

日本の北方領土のような扱いの土地とはまた違う。そこはホンジュラスの領土であって、地図にも公然とそれが載っていて、政府直轄の役所もある。しかし、ホンジュラス人と話してみると、庶民9割8分くらいはそこへ行ったことがなく、そのうち5割くらいはその名前さえも知らない。また、ここではホンジュラス通貨のレンピーラと並んでドルが当たり前に流通し、町の共通語は英語という所。それは、カリブ海に浮かぶ三つの島、ロアタン、ウティラ、グアナハだ。

日本のガイドブックなどによると、特にロアタンとグアナハは、「アメリカ人の高級リゾート地」と

して紹介されている。一般ホンジュラス人は首都のテグシへも行くこともなく、このソナゲラから一歩も外へ出ずに一生を終える人も少なくない。そんな中、いかにも物価高そうな彼らが所へ近づけるわけがないように、なっているののだから。

ちなみにホンジュラス本土のコーヒーやバナナ農園などの主要産業は、ほぼアメリカなどの外国資本に牛耳られている。それは、ホンジュラス資本の工場よりも高い技術を持つ外国資本の方が、高品質で生産性も高いという、市場経済の中で優位に立てる能力を持っているからでもある。それはいわば営利企業として努力の結果であり、資本主義の競争原理上、国の制約がなければある意味当然のことなのかもしれない。

三つの島は、カリブ海に浮かび海などの絶景をもち、アメリカ本土からも遠くない格好のリゾート地である。それゆえあのコーヒーやバナナ農園産業と同じく、外国資本に開発され、ホンジュラス人が今さら手出しができなくなっているのだ。噂や本で見聞きするように、この島がどれだけ外国資本の食い物にされ、島の主要な第3次産業に外国人がどれだけ根を下ろしているのか、実際に目で確かめてみたいと思っていた。

12月と2月初め、そのうちの一番物価が安いという島、ウティラへ隊員友達と行って来た。

### バックパッカー天国？

『地球の歩き方』によるとウティラ島は「ダイビング・ライセンスを格安価格で取得できることで有名だ」という紹介文で始まる。世界一ダイビング料金が安いという噂もあるほどで、多国籍のバックパッカーでにぎわうウティラ島だった。

往復のうち、往は飛行機を、復は船を利用した。飛行機はラ・セイバから出ていて、所要時間は約10分。10人も乗れば一杯になる小型飛行機は、私たち以外は欧米系白人ばかりの乗客を乗せ、セイバを出た後あっという間にウティラへ降りた。



ウティラの飛行場は、ただ滑走路部分がわずかにアスファルトで、後は草が所々に生えたような運動場。もちろん管制塔や空港施設などの建物は、一切何もない。降りるとすぐに、ワンボックスカータクシーの客引きが何人も近寄ってくる。私には早速出ましたという感じに思えたのだが、みんな「英語」で客引きをしている。しかし無理矢理スペイン語で答えると、ちゃんとスペイン語で返ってきた。ここでは「公用語」が英語なだけで！？「現地語」として、ちゃんとスペイン語は残っているようだ。「そこまでやられてなかったんだ」と、ホッとする。この客引きにのらないと、あとはこの運動場から、ウティラ中心地まで歩いていくしかない。地理もよく分からないので、ふっかけられているのも承知の上、値段交渉をして車に乗る。

ウティラ 1 回目のときは、『地球の歩き方』を見ながら、ダイブショップの老舗として紹介されているダイビングスクールへ行き、オープンとアドヴァンス・ウォーターという、ダイビング免許を一気に二つ取った。試験のうち実技は英語、筆記は日本語。日本語の問題集も貸してくれ、それで実技の前に予習することができた。実技の前にしっかり本を読んで予習しておかないと、なんのこともさっぱり分からなくなり海底での実技についていけなくなる。しかし、さっぱり苦手な英語のうえ、しかも水中、海底と今まで生活し慣れていない環境で、けっこうドキドキだった。2 回目のときは、レスキューの免許を取ろうかと思ったがやめた。ファン・ダイブという、普通のダイビングをして帰った。

ウティラは、アメリカ人を中心に世界中からバックパッカーが集まっていた。中にはもう 20 年ほど、パッカー生活を続けていて、その生活費はネックレスを作って道ばたで売ったり、道に座ってギターを弾いたりして稼いでいるという、<sup>つわもの</sup>強者パッカーのイギリス人もいた。また新婚カップルで、生活費現地調達型のパッカーを続けて 8 年目だというイタリア人など、何人もの世界級変わり者達に会えた。2 月の時には日本人バックパッカーにも何人か会った。日本人では、春休みを利用しての大学生パッカーもいたし、1 年前後、地球上をパッカーして廻っているという人もいた。

1 2 月の時には、住所不定の浮浪者と見間違えるような汚い格好のパッカーだけではなく、きれいな格好の欧米人旅行者も多くいた。彼らの話によると、普段は「銀行マンしてます」「会社勤務です」「会社員してます」「学校の教員です」と、普通のサラリーマンなのに、2 ヶ月もの休暇を取って旅行しているとのこと。私がびっくりしていると「休暇 2 ヶ月は当たり前だよ。」と彼ら。会社員だというアメリカ人は、いつもこの休暇のとき「1 か月は家で家族とゆっくり過ごし、後 1 か月は他の国へ旅

行へ出るんだ。」とその様子を話してくれた。長期休暇のことは情報としては聞いていたが、改めてこの休暇を取って当たり前の国の人を目の前にすると、どうしても驚いてしまう。「う～ん。2ヶ月の休暇は日本では考えられないことだよなあ。」とは思いますが、何故か単純に「うらやましーい」とは思えない。「彼らの国がそれでいいんなら、いいんじゃないの。」と、ただ思うだけだ。

### まだまだ「ホンジュラス」が残っているホンジュラスの島

ウティラは小さな町だ。小さな島なので、山に挟まれたわずかな平地に、海に沿って長細く500mほどの店が連なっている。ホンジュラスには間違いないという空気が漂っているが、またホンジュラスには確実にないという雰囲気も漂っている。まず、町の看板はほとんど英語。歩いている人々の7割が、ダイビングとビーチ目当ての欧米人風観光客。飛び交う言葉も、ほとんど英語。

しかし私にとって何よりも気が楽なのは「行き交う人が、誰も私を凝視しない」ということだ。任地と違ってみんな私を普通の通行人として扱い、ほっといてくれる。そのことがこれほど気が楽で、これほど安心して空気が吸えることかと、1年ぶりに味わった普通のような感覚のような気がした。

彼らと話をしてみると、「日本から来たの?」「日本人?」と、まず日本という名が出てくる。2回の島でかなりの数の外国人観光客と話したが、いまだに「中国人?」と聞かれたことは一度もない。また実際、時々東洋系の人を見かけ話しかけても、みんな日本人で、中国人は一人もいなかった。急進中の中国とはいっても、まだまだそういうことなんだろうか?

ダイビング・ショップは、ほぼ100%近くが、外国人資本のものだろう。たくさんあるので全部は分からないが、私が知っている限りショップのオーナーは外国人だ。土産物屋も「お、こぎれいな。」と思って入ると、必ず外国人オーナーの店だ。だがよくあるホンジュラス風の、いわゆる売る姿勢をあまり感じられない接客態度のまるでなっていないような店、私にとってもう慣れ親しんだタイプの店も何軒かあった。露店を出して、ホンジュラス料理のトルティージャを焼いている人や、マンゴーやパイアを売っている人など、肌の黒いガリフナ現地民らしき人もいる。しかも彼らは、英語は商売用に数字程度しか話さず、日常用語はスペイン語。まだ「ホンジュラスの息も残っているんだな。」とホッとす。

日本のガイドブックには「ウティラは、他の2島が良くも悪くも観光化され、地元の人々から隔離されたリゾート地になっているのと違い、この島では旅行者が素朴な町の中に入り込める」と紹介されている。他の2島を知らないので、比較しての確信は持てないが、これでもまだこの島では、ホンジュラスを感じる事ができると思った。

しかも、物価も思ったほど高くない。この島で最高級ホテルでも、部屋代は二人で58\$。でも、そんな高級ホテルには、私はもちろん一般のパッカーは泊まらない。一泊3\$のホテルが、この島の相場だ。その代わりに、トイレもシャワールームも共同だし、シャワーはお湯はなく水だけ。食事は半畳ほどの小さな共同キッチンがあるので、みんなそこで順番に自炊する。何でも共同だから、自然に他の国の人と話す機会もできるので、この方が楽しく、私は好きだ。

### カナダ人だというアメリカ人

不思議だなあと思っていたことがあった。ここで出会うカナダ人バックパッカーは、大体がカナダ国旗を自分のザックの正面、一番よく見えるところに縫いつけているのだ。

あまりにもそれが多いので、どうしてそんなことをするのか聞いてみた。するとその答えは「僕らカナダ人は、アメリカ人と似てるだろう。だからよくアメリカ人と間違えられるんだ。でも、世界にはアメリカを嫌っている人がかなり多くいるから、間違えられたら危険なんだ。だから、わざわざ自分はカナダ人だと主張しているんだよ。」ということだった。超大国アメリカは、その単独行動の代償を、国民がそんなところで被っていたのかと思うと、ちょっと以外だった。

国旗を見てカナダ人かと思って話していると、実はアメリカ人だったりする人が何人かいる。どうして、国籍を偽るのかと聞いてみると「僕はアメリカ人だが、このカナダ国旗をバックに縫いつけていると便利なんだ。第一危険度が減少するからね。」と。「へえ！！」けっこう私は驚いた。アメリカでの公教育の根幹は、自由の祖国としてアメリカへの崇敬と忠誠におかれているという。それはいかにもアメリカらしい方法だと思うが、だからよっぽど国に忠誠を誓う人間ができあがるのだろうと思っていた。しかし実はそうでもない人も、やっぱりいるらしい。

そんな彼らはカナダ国旗という安全と思う牌を選択しているのだから、国の枠にとらわれない「地

球市民意識」を持っているわけではないだろう。自分の身の損得のためだけに、安易に国籍を偽れる彼らが私にはちょっと不思議に思えた。

私は特に「日本」を意識することなく生活していても、日本に守られているという自覚のない日本人だった。日本というこの快適な人工空間は、ふとすればその存在さえ感じにくい。しかし必ずそれは影で日本人を守ってくれている。アメリカ人と話していて、あらためてその「国」という大きな存在を感じた。

#### 欧米人 東洋人 メスチーソ 東洋人 人種差別は意識下に現存しているのでは？

度々書かせてもらっているように、生活の中でホンジュラス人から人種差別を感じるのはよくあることだ。

先日、ラセイバの町を歩いていたときである。通りすがりの高校生らしき若者集団に「チーナ！！」と吐き捨てるように言われ、いきなりバックを投げつけられ、その上一斉に唾を吐きかけられた。いきなりのことだったので私がひるむと、彼らはそんな私を見て指を差しながらゲラゲラ笑っている。青い私は思わずキレそうになったが、ここで「いや日本人だ」というのも自分が納得できないのでやめた。しかしここで体験するこんな出来事は珍しくない。どうして彼らに、そんな悲しき差別意識があるのか、冷静に話してみようと思い、吹き上がる感情をなんとか抑えて優しく話しかけたが、彼らは一斉に逃げて行った。もう同じステージで話す気もしなくなった。

タクシーと値段交渉をしていると、外国人だと思って高い値段をふっかけられ、私が当然のことながら「もっと下げてくれ」と言う。すると「お前は中国人だな。日本人ならそれで払うが、中国人なら払わないんだ」とくる。差別意識を上手く利用し、日本人心理を微妙なところで突いた上手い商売セリフだなと思う。

またNGOのアメリカ人を家に下宿させているという、ホンジュラス人と知り合いになり話す機会があった。その家の奥さんも言う。「中国人は汚い。肌が白く、髪が金髪の白人はきれい。」だと。ご多分に漏れず彼女も「中国人はネズミを食べるから汚い」と言う。それでも彼女はまだ話ができそうな人だったので、いつも思っていることを聞いてみた。「ホンジュラス人だって、牛や豚の臓物も眼も

鞆丸も、そして最後の血の一滴に至るまで全て食べるだろう。日本人にはその食文化は一般的にはないが、かといって、私はそれを蔑視しようとは思わない。その民族が何を食べるか、それはそれぞれの文化の違いだから、嫌悪感を抱くのは止められないにしても、それを蔑視や偏見の基準としてはいけない。私はそう思うが、あなたはどう思う？」と、ごく当たり前のことを聞いてみた。(日本ではこんな聞き方をすると、まずい関係になりそうだが、ここではハッキリと自分の考えを述べないと一人前としては扱ってくれない。)しかし彼女はしばらく考えた後「神が望むからよ」とニコッと答え、「やっぱり醜いから嫌いだ」となってしまった。

彼女だけではなく、ホンジュラス人からは「神が望むなら」「神が望むから」という答えをよく聞く。「『神』の考えじゃなくて『あなた』の考えが聞きたい」と言っても、どうしてもそれでごまかされる。また彼女が言う「白い肌、茶髪」への憧れは、他のホンジュラス人、特に多く女性の意識の中にある。

ホンジュラス人の明らかな中国人差別。最近思うに、その裏にはホンジュラス人の黄色人差別があるような気がする。

それはウティラ島で、各国の白人達と接していて思った。最初は思わなかったのだが、長く接すれば接するほど欧米人からの東洋人差別を感じてしまった。もちろんそれは全ての欧米人からではないことを断っておきたい。しかしバックパッカーだけではなく、ダイブショップのアメリカ人スタッフからもその差別を感じた。いや、そんなはずはないと思いたいが、東洋人に対する意識下の差別意識は彼らの中に少なからずあり、それが端々で現れているのではないかと思う。

日本は今でこそ豊かな国になって、日本人もこうして、欧米人種と一緒にダイビングライセンスなどを取りに来ることができている。しかし、この近代を造ったのは白人、欧米人種だとう自負が彼らの深層心理にあり、奢りが見え隠れしているからなのか。または近代国家云々を言う前に、肌、髪、眼の色の違いからくる単なる人種偏見が彼らの根底にあるのではないかと思う。

ホンジュラス人にとって、身近にある豊かな社会の象徴としてアメリカがあり、アメリカ崇拜者が造られている。そしてそのまま欧米人の代表的形容である、肌の白さ、髪の黄色さ、背の高さへの憧

れとなり、それにそぐわない東洋人種は差別の対象となる。たまたま日本は「物質的豊か」と思われたので、同じ東洋人でも「日本人」といえばその対象から外れているが、それは彼らにとって紙一重の差別意識であり、人種偏見の根本的な解決とは無関係ではないのか。

近代的な社会や物質的豊かな生活に憧れるのは、人間としてはごく自然な感覚なのかもしれない。ホンジュラスはコロンブスの上陸以来、伝統的文化、習慣を長年にわたって破壊され、変化し、民族さえも混血になっている。多くの流血の元この国を創り上げてきたとはいっても、民族や国という意識を固有の文化に基づく誇りとしては持ちにくいのが彼らではないだろうか。自分たちの伝統文化が壊され無きに等しい彼らにとって、民族主義や国家主義の意識が育ちにくい背景を考えると、安易に彼らが身近で豊かな国、アメリカ化を望むのが理解できるような気がする。

またホンジュラス人はよく「日本人の子が欲しい。日本人と結婚したい。」と言う。決して「中国人の子が欲しい。」とは言わない。そこには、東洋人差別と日本という経済大国への物欲的憧れとの、きわどい境界線上の意識が働いていると思う。

しかし、今の日本人の茶髪、青いカラーコンタクト、美白志向・・・これらの流行は一体何だ？ 『セシル』のカタログは、どうしてモデルに欧米人ばかりを使ってるんだ？ などなど・・・しかしそういう私も、カラーコンタクトこそしてないものの、ちょっと茶髪と美白志向はピッタリ当てはまってしまうのかも・・・。「真っ黒い髪より、少し茶色い方が髪が軽く見えていい。」とか「白い肌方がきれいだから、日焼けしたくない」などという感覚は、単なる流行なのだろうか？ それとも私の深層心理の中にも白人崇拜というような、恐ろしい差別感情があるのだろうか？

しかもすらっと背が高く、出るところは出て、くびれるところはしっかりくびれ、スタイル抜群の欧米人。また目鼻立ちがくっきりしていて、茶髪の美しい髪を無造作に束ねているところさえも絵になっている欧米人。そんな彼らに囲まれてダイビングや食事などをしていると、私はちょっとした劣等感のようなものを感じてしまう。「きれいだよなあ彼女たち。かっこいいよなあ彼ら。」と、思ってしまうのをあわてて打ち消し「何考えてんだ。私は日本人だ。それでいいじゃないか。」と思うものの、自分でごまかしているような気がする。

13世紀、ジンギスカンがアジアからヨーロッパへ覇権を広げ、黄禍論の元となるような残虐の限

りを尽くして世界を君臨していたその頃。ヨーロッパ白人達は、モンゴル人の日常格好である短髪、眉そりなどが、最先端ファッションとして捉えられて流行していた。白人女性も、モンゴル風男性に魅せられていたという。それを考えると、つまり近代は白人が造ったから、地球規模で白人風なのが流行しているという、単なる歴史の一過程にすぎないのだろうとも思う。

いずれ、この人種流行に変化が訪れるのだろう。経済と社会構造のグローバル化の進む中、今度はいずれかの民族が台頭するのではなく、再統一、再編成上での混合流行となるのではないかと思ったり、先進国中心で経済の再編成が進むとともに、その価値観の中に途上国は、組み込まれてしまうのではないかと思ったりする。ここホンジュラスでは、もうすでにアメリカ価値観への再編成化がはじまっていると思う。

ホンジュラスには、ここコロン県や隣県など北部地域を中心として、4%ほどのガリフナ民族がいる。アフリカ大陸からアメリカ大陸へ向けて、多くの奴隷運搬船が運行していた頃、その途中、カリブ海沖でいくつかの運搬船が嵐にあって難破した。そこから逃げたり、必死の思いで岸へ泳ぎ着いたりして助かった黒人達の子孫が、このガリフナ民族である。だから、彼らは縮れ髪に真っ黒い肌をしている。

ところが、(全てのホンジュラス人ではないだろうが)彼らのガリフナに対する偏見には、時々強烈なものを感じる。魚の行商をしていたガリフナ民族のことを私が話すと、彼らは「ガリフナをどう思う？」私が「いや、いい人だったよ。」と言うと、「本当か！！ とても醜いじゃないか。」と言う。そして、真っ黒い牛を指さしながら「あの汚い牛と同じ色じゃないか。」と、顔を最大限にしかめっ面しながら言う。

この強烈な人種差別は、どうしたことか。ほぼ単一民族で単一の価値観の元、民族間の熾烈な争いを経験してこなかった日本人の私ゆえに、その強烈差別感情が理解できないのか？

「あ～酔っぱらっちゃたあ～。」では、**すまされない彼らの意識**

「飲む、打つ、買う」のうち、ここでは「飲む」だけが、私には異様と映るくらい「悪」と認識されている。

もちろん、この国にもビールなどのアルコール類はある。そして、適度な大きさの店なら、だいたいどこにでもビールは置いてある。男性はたまに飲むが、多くの人々からあまりいい目では見られない。しかし、もし女性がそれらに手を出すのならば、かなりの覚悟を持っていないとできないだろう。しかも女性の喫煙ともなれば、偏見、蔑視、差別・・・と負の相当な覚悟がないと、それは考えられないほどだ。

ここでの酒と煙草に対する認識の異様さは、いつも感じていた。どうして彼らがそんな認識をもつのか、それに対する私なりの考えを書いてみたいと思う。

うちのママは、「カセタ」というのを経営している。この「カセタ」というのは、日本で言えば、駅の構内にある「立ち食いそば屋」のような感じ。カセタは、ホンジュラスにはたくさんある。そのカセタに、私もよく行くのだが、ビールも置いてある店なので、客は食べながらビールも飲む。客は「ほろ酔い」状態で、機嫌良く店の人としゃべっていると、店員はほどほどにその客の話につきあっている。しかし、私が店の奥から、ちょっとでも顔を見せると、ママは「ミヨ、出てこない方がいい！ 危ないから！ 酒を飲んでいる悪い人がいる。」と、即座に私に言う。そして、客が何本も次々に注文すると、無愛想に注文されるままビールを出すのが、明らかに飲み過ぎで酔っぱらいが激しくなってくると、ママは客であってもおかまいなく、「もう帰ってくれ」と、彼を追い出す。商売といえども、飲酒に対する自分の信念を通すそのママの様子に、私はなんだか感動していた。

また夕方頃、家のすぐ横を歩いていると、この珍しい東洋人の私だから何だかんだと喋りかけてくる人がいる。私も答えて話しをするが、どうもその人、ろれつのまわりがあやしいし、酒臭いにおいもする。「あ、少し酔ってるな。」と私が気付いた頃には、すぐ後ろに一族の中の誰かおばちゃん立っていて、「ミヨ！ これは酔っぱらいだ！ 危ない。早く帰ろう。」と、私の腕をつかんで有無を言わずひっぱっていく。そしてその後、「ミヨ、夕方に一人で出歩いたら危ない。酔っぱらいがいるんだから」と、こんこんと説教してくれる。

道ばたで、話しかけてくる男性がいて、私も相手になっていたとする。ただ私が生きているだけでさえチェックが厳しいここで、その相手が煙草をすっているような人だったら、もう大変だ。どこかしらに、チェックマンがいて、それを逐一うちの一族の誰かに御注進なさり、早速その夜に「ミヨ！」と、お呼びがかかる。

うちの一族の言うことは、いつもこうだ。「暗くなってから、(または暗くなりそうなのに)一人で歩いては危険」「お酒を飲んでいる人は危険。お酒で酔っぱらっている人は、悪人。近寄ったらダメ!」「煙草を吸っている人は、悪魔! さっさと通り過ぎなさい」と。それはうちの一族が言うだけではない。以前の、サンタルシアでの下宿先でも家族は「アメリカ人は嫌い。お酒を飲むから」と言っていたし、夜道を歩くときは「酔っぱらいがいたら危ないから、必ず誰かと一緒に歩くように」と、やはり警戒していた。他の隊員でも「家でビールを飲むと、家族が機嫌悪いんだよな。」と言う人や「家で煙草を吸うと、お前の顔が悪魔に見える。と言われるから、嫌でも禁煙するいい機会になったよ。」と言っている人もいる。

これらの酒に対することはアメリカの「禁酒法」から来る流れなのか、キリスト教、宗教的な観念から来る流れなのか? 宗教的な絡みから考えると、一つ目には、彼らの中に人は皆「性悪説」だという意識、または人を「善と悪」でハッキリ区別してしまうという価値観があり、それが影響しているのではないかと思う。

だいたい「人は死んだら皆、仏になる」だなんて、そんな尊大極まりない楽観思想があるのは、いくら仏教国とはいえ日本くらいではないのだろうか?

「仏」だなんて、そんな崇高な位置に、「人は死ねば、皆行ける」という、そんな甘い考えになれるのは、「人は皆、本当は善なんだ。」という「性善説」が根底にあるからだと思う。日本人的な考えでは、人は皆、生まれながらにして光り輝く徳をもっている。しかし、それを磨かないでいると、墮落してさびる。それが「身から出たさび」なのだが、しかし、本来は徳をもっているのだから、磨けばまたその徳は現れると。そうして、日本人は、人を完全な「善・悪」だけの一元論的判断をせず、いつも多面的に見ようとしてきた。だからつまりお酒を飲んで酔っぱらい、悪態、醜態をさらしても、「それは酒のせい。本来のその人はそんな人ではない」と納得させる。まして飲酒によって、それほどひ

どい醜態ではなくて、「ほろ酔い」なんていう状態の人は、日本人なら「あ、彼はいい具合にお酒がまわってるんだな」ぐらいの共感で済ませてしまえる。

また二つ目には、飲酒の持つ凶暴性からくるものではないか。それは平和な日本で私が失っている、危機管理意識なのかもしれないし、理性の制約の少ないこの本能社会で、飲酒によって現れる人間の凶暴性から自分を守る本能なのかもしれないと思う。

この酔っぱらいは、日本の酔っぱらいよりも、確実に危険なのは確かなことだ。普通の状態の時ですえ、彼らは理性の抑制がきかず、私欲のままに動かされやすい。それは、今までにも何回も述べさせてもらった。その上、彼らは普段から武器を持っている。

例えば、マチェタという刃渡り50cmぐらいの大きなナイフ。これは、生活上様々な場面で使われていて、彼らは当たり前それをいつも腰に差している。うちの一族の男性も、いつもそれを腰に差したり、手に持っていたりする。

ソナゲラはみかんの産地なので、みかんを絞ってジュースにする工場が近くにある。先日バスに乗っていたら、その工場帰りの労働者達が30人近く、みんな腰に大きなマチェタを2本も3本も差したまま乗ってきた。何も起こらないのは分かってはいるものの、私は男性達とそのマチェタを目の前にして、座席の隅でどうしてもか震え上がる気持ちが起こってしまった。

また、拳銃も申請すればここでは合法的に所有することができる。しかし、政府の監視機構なんてあってなきに等しいこの国なので、無認可で所持している人は多い。そして大の男が、その銃をまるで子どもがおもちゃを見せるかのように、嬉しそうに私にも見せてくれる。先日も近くのおっちゃんが見せてくれた。ワルサーPP、19口径ベレッタ・・・とかなんとか、片知識だけで知っている名前を挙げながら聞いてみる。でも「この名前？ さあ？」と、大体の持ち主はその名前を知らない。「拳銃を所持するのに、そんないーかげんなもんかな？」と不思議に思ってしまう。「申請の時、銃の名前は書かなかったの？」と意地悪く聞くと、相手は片目をウインクさせながら「そんな物はいらないさ。」と平然と私に言うからビックリする。まあ、彼も相手を見て全くの重要人物でない私だから、気軽に言っているのだろうけど。

そんな身近に、人の殺傷能力の高い武器が存在するのだから、酒によってますます理性の歯止めが

利かなくなると、何をしでかすか分からない。実際、私も、銃を空に向かって乱発する酔っぱらいに出会ったことがあり、生まれて初めて聞く銃声に、初めは何の音が分からなかったほどだった。

それらを考えていると、先日日曜日の教会のミサで興味深い言葉を聞いた。

「神は全ての人々を集め、羊飼いがするのと同じように、彼らをより分け、羊を右にやぎを左におくだろう。」というような一節が読み上げられ、私はハッとしました。

人間を、誠実か不誠実か、信頼に値するかしないか、それを各人の何かの行為を基準に判断する。そして善か悪かの判断をして、あの羊飼いのようにハッキリと区別してしまう。普段の彼らの「善か悪」かの一元論的志向、それはここからきているのではないだろうか。

しかもキリスト教では絶対的な存在の神は、一つしか存在しない。砂漠の厳しい気象条件で生まれたキリスト教は、不毛の大地と人間が向き合ったとき、その身の無力さを感じ、神を絶対神と定めた。それゆえ砂漠で生きる民らしい、妥協のない厳しい掟を定めている。またその過酷さゆえ、その神は絶対神であり、人物、事物をある事柄からだけで、二分するという厳しい判断ができるのだろう。

一方日本人の根底には、森羅万象みな神が宿り、人は死ねば仏になり神になるという多神教の意識がある。「先祖」となった御霊は、氏神として人々と村を守るという先祖崇拜。それは、キリスト教の一神教とは、全く類をなさない<sup>やおよろず</sup>八百万の神の考え方だ。不毛の砂漠でもない、緑豊かな土地の日本だからこそ生まれ、自然と向き合って生きた農耕民族だからこそ、その自然万物に宿る人間を超越する力、神の存在を感じたのだろう。事の善悪は、一つの神によって判断されるものではない。八百万の神がいて、多元的な判断がある。だから日本人なら「飲酒・煙草」だけで、人物の判断はできないし、してはいけない。と、そう考える。

私も、ただ「酒を飲んでいる」「煙草を吸っている」それだけの事柄で、人物の善悪まで判断するようなことはできない。「飲酒」が人の理性を狂わせ、狂気に走らせる引き金となる危険性をもっていることは間違いない。また国や民族の歴史的な違いによって、その狂気の振るう幅が異なるとも確かだ。だからうちの一族が忠告してくれることは、ありがたく受け止め、自分の安全管理のために守っていきたいと思っている。

このキリスト史観から考えると、一族のクリスマスをうらやましそうに覗いている子どもに「あれは頭が狂っている。」と平気で呼ぶ彼らのことも、理解できるような気がする。またアメリカが「ならず者国家」の後は「悪の枢軸」やらと強烈レッテルを貼ったり、他国に向かって「テロの味方か、アメリカの味方か」などという極端論を唱えることが（上手い方法だとは思いますが）平気できるのだろう。

そう考えると、今まで何度も書いてきた、人々の「何でもハッキリ」言うこと、そしてこの好き嫌いの明確さと直接的表現も、この一神教の考えから来ていると思うと、理解できそうに思えてくる。

また島国日本は、他民族によって政権が交代し、その度にその民族の文化や伝統が破壊されてきたというような、極端な粛清、浄化、圧政の歴史を持たない。したがって他国民が経験してきたような、「他」に対するさほどの危機感が無くてもやってこれた。だから、日本には全ての人は善意をもっているはずだという性善説的な考え方や、日本の多神教を元にした物事や人物への寛容な善悪判断があるのであり、また何か問題が起これば、その真の問題点は自分の中にあるという「自分が変われば、相手が変わる」的な考え方もある。しかしそれは、日本国内でしか通用しない価値判断基準なのだと、私はここで彼らに教えられたような気がする。

この国の人々は、「他」に対する、警戒心が日本人よりも高い。「油断すれば何時滅ぼされるかわからない」という意識が強い。一見、日本人とは比べようもないほど、とても陽気で親密的な彼らだが、しっかりと心の奥には自己を守る砦があると感じる。

この意識の基本的な違いは、日本特有の方法での反戦平和信仰と重なり、国防を考える上においても決定的な違いを生み出しているのではないかと思う。

・・・拡大解釈？　かもしれない。その上私はキリスト教のことも神道のことも、専門的に勉強したこともなければ深く関わったこともない。中学生の頃「宗教」というものに心身共に傾倒していく人々を不思議に思い、それには人々を引きつけるどんなパワーが隠されているのかと興味を持った時

期があった。そしていくつかの宗教団体と思える所を、尋ねて廻ってそのパワーの秘訣を知ろうとしてたことはある。しかし宗教とは、一切の疑いなく信じ込んでからでなくては、その本当の意味やパワーを感じることはできないのだと思った。だからあちこちの宗教へ、知りたいという好奇心だけで片足入りしていた私は、その殻しか分かっていないと思う。ましてははっきり言って今の私に、そこで得られたことが残っているとは思えない。

これは一方的な私の解釈なので、かなりヘンなところがあるかと思うので、それは読んで下さっている方々、思うところをどうぞご指導下さいませ。

3月17日

### いきなりの訪問客

ちょっとここで、今年3月の、いきなりの風変わりな訪問客Tについて紹介したいと思う。

Tは日本人で、今の住所はとりあえず北海道にある。Tと私が初めて出会ったのは、阪神大震災の時のボランティア仲間としてだった。兵庫の西宮の公民館で、ボランティアとして住み込み生活をしていたとき、東京の日本一有名であろう国立大学の学生だったTがいた。Tの田舎は静岡にあり、その後私が東京から京都へ歩いたときには「大きなザックを担いだ変わった女が来るから、泊めさせてやってくれ。」と家に連絡しておいてくれるなど、お世話になった。

私は何か事を始めるときや、学生時代の旅をするときなどは、自分の中に二つの柱があった。

まず一つ目は、大金を用意せず「できるだけ安上がりな貧乏旅を」ということだった。貧乏旅は学生という経済的な理由による必然性もあったのだが、それだけではなかった。

私のいう貧乏旅というのは宿泊代を浮かすために、駅前や神社など安全そうで適当なところを見つ

けてテントを張ったり野宿をしたりする、食事代を浮かすために、どこかで食べ物を見つけてきて自炊をする、交通費を浮かすために、ひたすら歩いたり人の情けに預かってヒッチハイクをしたりする、町の銭湯を探して久しぶりのお風呂に入ったり、公園や駅のトイレなどの適当な水場を見つけてきて、そこで顔を洗ったり洗濯をしたりする、そんな旅だ。しかしそれは私がやっていただけではなく、同じ登山部の部員達や自転車・バイク旅やバックパッカー達も、そうした貧乏旅をしていたのが多かったと思う。

またそういった旅は、直接その土地の人と話したり接したりする機会も必然的に多くなる。そういった地元密着型の直接経験が、自分の認識や価値観を広げるのに役立つと思っていた。つまり～土を踏み、風に聞き、声に出会う、そして時を知る。～と、司馬遼太郎の『街道を行く』の第一期のオープニングが頭の中でまわっていたのかも……。水の不便さなどは、よく考えれば今私がやっているここでの生活スタイルとあまり変わらないのだが、その当時はさしたる不便も感じず、それを充実にさえも感じていた。

私にとっては、そうした貧乏旅ならではの生きるための手段探しが、直接自分の命に関わるときもあったのでやりがいがあったのだ。今から考えれば、そんなこと生きるための手段でもなんでもなく、ただ学生という用意された安心感のあるお盆の上で、「生きるためにごっこ」をやっていたようなものなのだが、その当時はそれなりに大まじめに自分の成長のためになると思っていた。

二つ目は、二人以上などの複数人ではなく「独り旅を」ということだった。

その「生きるためごっこ」の旅が、独りだと旅先などで起こる「生きるため」のトラブルに、必然的に独りで対処せざるをえなくなる。それらに独りで対応し、克服するときの充足感にやりがいを感じていたのだ。また独り旅の方が、事の手先や旅先で意外な出会いが多かったからでもある。意外な出会いとは、社会の多数派には属さない、ともすれば大勢の正論からはすれば異端児、脱落者と見なされる変わり者達との出会いのことである。

日本社会の組織体は何かと、変わり者や色が違うような者を好まない。取るに足らない差異でも見つけられれば、異物のように排除されるようなところがあるのではないかと思う。しかし少数派の彼らは、異端児として生きていくために、自分なりの「法」をもっていた。また自分が異端児であると

いう自覚を持っていて、それに伴う不利益やリスクを背負う覚悟ももっている。そんな世間の逆風をものともせず、彼らなりの「法」を柱に生きている姿を見ていると、何とも感動するのだ。

また彼らは若いなりの経験から、彼らは所詮人間は一人で生きていくしかない厳しさを肌身で知って感じていたように思う。漱石『草枕』の有名な冒頭文に出てくるような知と情と意、それが世間だといふかなさを彼らは知っているように思う。だから権威や権力といった大きなものに頼ることなく、自分の力で生きている彼らからは、旺盛な生活力と生きる力を感じるのだ。

貧乏旅先では自然とそんな連中が駅前や公共トイレ前などに集まってきて、夜な夜なそんな話になった。私も含めみんなろくにお風呂にも入らず、寝るときはそのまま星の下、などという汚らしい貧乏旅の連中なので、一般生活をしている人たちから見れば異様だったのだろう。目が合うと見てはいけなような物を見たというような顔をしてそそくさと通り過ぎる一般人や、目をしかめる方も多くいらっしまった。

今も連絡し合う旅仲間では、今も旅人生のようなものを送り、ウティラ島で会ったパッカー達のように、何年も旅を続けている人もいる。

日本最大の大きな組織の中で守られて生きている私が、安全地帯のような所から言うのも卑怯な話なのだが、今の私の立場とはかけ離れた、手に及ばないところにいるそんな彼らのたくましい生き方だからこそ惹かれるのだろう。

Tも一種の旅先で出会った、そんな変わり者のうちの一人だ。おとなしく旧システムのレールに乗っかっていれば、学歴の肩書きを盾に、国家公務員一種へでも一流企業へでも入れ、周りとは波風の立たない人生があったただろうに、(・・・実際はそう簡単じゃないのかな)それをあえてしなかった。Tほど変人ではなくても、それによく似た変わった人は他にもたくさんいる。彼らは私が学生時代にやっていたような、勘違いお遊び旅を単なるお遊びに終わらせず、人生そのものを自分試しの旅と考えて自前で勝負して生きている。

しかしもちろん、組織体の中にも公務員や一流といわれる企業の方々の中にも、私が尊敬している方々はたくさんいらっしやることと、旅先だけではなくとも日常の中でも、そういった異端児のような魅力ある方々に出会えたことを、念のため断っておきたい。

西宮以降、Tは何度も消息不明になっが、こうして時々ひょっこり姿を現す。それが今回は連絡もなく、いきなりホンジュラスだったから驚いた。たまたま連絡が取れても、Tはいつもバイトみたいなことをして全国をふらふら廻っていた。秋頃までは、しばらく北海道の農家でバイトをしていたという。Tなりの「法」を元に、将来への何か企みのある放浪なんだろうと思う。Tは「いわゆる、今はやりのフリーターさっ」と言っていた。同棲中の彼女を北海道に残して来ているらしい。「俺なんか、まだモラトリアムの延長やってるだけだ。」なんて言っていたので「分かってるなら、カッコつけずにさっさと就職するかどうかにかすとかして、ちゃんと納税せなあかんよ。」と私もカッコつけて笑っておいた。

パスポートの出国期限である3ヶ月間、メキシコから中米あたりを放浪した後、日本に帰るそうだ。私も人のこと言えないが、Tも同じく今年三十路を迎える。彼の人生は一体どこを目指しているのか、楽しみだ。

人は、夢を追いかけて行動している人を見ると、「気楽な人生だね。」とか「そんな自分勝手なことができる環境でいいね。」とか言いがちだ。しかし、それはどうかと思う。私がウティラで会った各国のパッカー、そしてTも、夢を叶えるためにそれなりの犠牲を背負っている。

夢や希望というのは、いつでも人が生きていく上での大切なエネルギーだろう。しかし大事なことは、それが様々なしがらみで実現できなくても、決してその言い訳をしないこと。そしてそのチャンスが来ればいつでも実行できるように、自分を高めておく。その繰り返しと継続が人生なのかもしれないし（なんて悟ったような偉そうなことを言ってごめんなさい）、また一方人にはどう努力してもどうしても越えられない、それぞれのバケツの大きさがあること。それを知るのも悲しいことだが大切なことかと思う。

ホンジュラスに来て、今日まで何度泣いたことだろう。頭では分かっているつもりなのに、泣ける理由を具体的に考えようとすると、分からなくなる。一体何に、どんなことに負けようとしているのか、何に焦っているのか自分で自分が分からず、自分の中にある問題の解決糸口が見えずとても苦しい。それはどうしようもないほどの孤独感からなのか、自分の実力の限界と自分の無力さを思い知ったからなのか、頑張らねばという自己強迫観念からなのか、自分の弱さが噴出しているのか・・・それとももっと単純で、自分では意識していないうちに油っこいホンジュラス料理が毎日続くことに無意識の拒否反応を起こしているのか、異言語圏での生活に想像以上のストレスを感じているのか・・・分からない。

来年の今日、私はホンジュラスを発つ。

残り任期、正味1年。早くこの焦燥感から抜け出し、言い訳をしない人生のために、精一杯今を全うしたい。